

メイドさんのエッチなイラスト集

# メイドさんの色事





























極野朋美が勉強中の松野芳夫のもとへおやつを持っていくと、芳夫は勉強道具をしまい、漫画を読み始める。噂では、随分とHな遊びを経験しているという朋美は、その仕事ひとつひとつが、色っぽく誘惑的だった。

「朋美さん…またあ…わざとやってるんですか？」  
「ええ…何を？」  
二人きりになると、妙に馴れ馴れしくなる朋美は、戸惑う芳夫をさらに困らせるように、お尻を向ける。朋美のスカートの中のパンツが見え、芳夫は目のやりばに困る。彼女が松野家でメイドを始めてから約一年、両親がいない時の朋美のスケベっぷりに、芳夫は慣れることはなかった。

「さあ、おやつ時間よ」  
お姉さん口調の朋美の言葉が、芳夫には意味深に聞こえる。  
「ん？それとも、こっちがいいの？」  
朋美はいつものからかうような眼でみると、股間を触らせる。恥ずかしがる芳夫の反応が朋美にとってはかわいくて仕方がなかった。  
「甘い舐めてしょ」  
戸惑う芳夫を面白がる朋美は、自分の股間へ芳夫の顔を誘導する。きつとおまんこをおやつに見立てているのだな、と芳夫は理解したが、素直に舐めることは出来なかった。朋美の性器が、芳夫の口に軽く触れると、芳夫は淫らな気分になった。

「お勉強の調子はどう？」  
「まあ…ちゃんとやってるよ」  
いつもと違って、乱れた服をなおさない彼女に、芳夫はそわそわし始めた。  
「…こっちのお勉強はどう？」  
「…ほとんどしたことない」  
芳夫は朋美の性器から眼をそむけ、漫画に目をやる。  
「お勉強手伝ってあげようか？」  
芳夫が返事をする前に、朋美は芳夫の股間をまさぐる。  
「ちよっと、大きくなってんじゃない？したいんでしょ？」  
「そ…そんなことないよ」  
「正直に言っちゃたら？ほら、おっきくなってきた。大丈夫、させてあげる」  
メイドの姿をしたエッチな女の前に、芳夫は力なく無抵抗になる。毎日のように、誘惑する朋美と距離を置いていたが、本当は、もっと近づきたかった。朋美のキスと愛撫で芳夫は勃起していた。

勉強の休憩中に漫画を読むのを辞め、芳夫は朋美が差し出したおやつを舐めていた。朋美のおまんこは、限界まで芳夫の顔に近付き、キャンディーとなっていた。淫らな穴からは、朋美の体液でぬるりと濡っていた。  
「舐め方はわかった？じゃあ、入れてみる？芳夫君の下のお口からも涎がでてましゅね」  
芳夫は、子供扱いする朋美にプライドが傷ついたが、ペニス先から出ている粘液の前では嘘はつけなかった。  
ぎこちなく挿入口に押し当てる芳夫のペニスを朋美は掴み、秘穴の奥まで挿入をした。芳夫が動く前に朋美の身体が揺れる。朋美の慣れた腰つきに、芳夫はなすすべがなかった。  
「今度は、自分で動かしてみて」  
芳夫はゆっくりと腰をい動かし始める。  
「そうそうもっと早くてもいいよ。ちゃんと奥まで入れて」  
肌の触れ合う音が響く中、朋美はテーブルにしがみつぎ、身体を前後させる。  
「おやつをあげるからじっとしてて」  
朋美の瞳は熱心に芳夫のペニスに絡みつぎ、芳夫のおやつを食べ、涎をたらしていた。











































夏の情事から一か月、あれから、彼女に恋人は出来たのだろうか。今野俊樹は、メイドの吉原愛由と廊下ですれ違つたと、夏の思い出に耽つてしまう。恋人と別れ、暇を持て余していた愛由は、毎日のように俊樹の部屋に遊びに来て、裸で抱き合っていた。夏が過ぎると、大学の始まった俊樹は勉強に集中し、愛由と裸で抱き合うことはなくなっていった。俊樹は愛由を見かけるたびに、夏の思い出が恋しくなった。

「最近、元気ないんじゃない？落ち込んだ顔してるように見えるけど」  
愛由は、仕事の休憩時間に俊樹の部屋を訪れ、俊樹を氣遣う。  
「そんなことないよ…」  
「ほんと…んん？こっちの悩みかな？これ久しぶりにしてあげよっか？」  
愛由のは股間にむけられた俊樹の視線に気づき、唇と手でフェラチオをする動作をする。予想外の愛由の動作に吃驚した俊樹は慌てて部屋のドアを閉めた。母に見られたら大変だ。  
「恋人…できた？」  
「ううん…エッチ相手なら…一か月くらいしてないけど…俊樹君はどう？」  
愛由が控えめに俊樹の股間を撫で、心を伺うように目を見る。一か月前の相手は俊樹だった。  
「いないよ…愛由さんと夏の間係を続けたいな」  
愛由は微笑むと、少し膨らんだペニスを口に含む。愛由は俊樹を見つめながら、男性器を口内愛撫し始めた。  
「そこにいるの？吉原さん」  
母親の声に二人はどきりとする。乱れた服をなおし、情事は中断された。  
「はい、何か御用ですか？」  
いつもより濡れた唇の愛由が尋ねる。  
「これから出かけるから、外出時には戸締りよろしくね。あと、食器洗いよろしくね」  
「はい、かしこまりました」  
部屋をあとにする母を尻目に、俊樹は部屋のドアを閉めた。  
「仕事に戻るの？」  
「うん」  
愛由は、名残惜しそうな顔の俊樹を見ると、股間を優しく愛撫する。  
「続きは、仕事が終わってからね」  
愛由は俊樹に軽く接吻をすると、食器洗いに向かった。



「ここでエッチしちゃう？」

愛由は食器を洗いながら、寝巻を脱ぎ下着一枚で新聞を見ている俊樹に言った。母親がいたら、下着一枚の姿でうろつくことは、許さなかっただろう。  
「ここでは…まずくない？すぐに帰ってくるかもしれないし」  
「帰りは10時ごろになるって、夕食の準備をするように言われているんだけど、何か食べたものある？」

愛由は俊樹の視線を追う。

「んー？愛由ちゃんのおまんこがいいのかなあ？おちんちんで食べる？」  
普段、聞きなれぬ場所での愛由の淫猥な誘いに、俊樹はその気になる。

食器を洗いながら、お尻を揺らし愛由は誘惑を始めた。

「服、脱いで、俊樹君」

言われたままに俊樹は脱ぐ。

「もう、濡れているし、俊樹君のおちんちん欲しいな？」

愛由は甘えた声で言うと、少しパンツをずりさげる。割れ目を触る指にねっとり愛由の愛液が絡みつく。愛由のあそこはもうすでに欲情していた。

「準備OK？」

勃起する俊樹をみて、愛由はお尻を突き出す。

俊樹の性器が、愛由の割れ目に入っていく。奥まで入ると、愛由の食器を洗う手が止る。流れ出る水の音が響く部屋の中、夏の情事の続きが始まっていた。

「あっ…あっ…はあん、やっぱり、生は気持ちいい」

愛由は水をとめると、仕事を放置して、自分から腰を動かし始めた。

食器洗いの水音が消えた部屋は、二人の愉悦の声と、求め合う身体のぶつかりあう音が響いていた。

あの夏のように、夢中で抱き合う関係が、始まりの日を迎えていた。











あの日の一件以来、牧山宗太は、仲の良かった住み込みのメイドの夏村冴子を見かけるたびに、憂鬱を感じるようになっていた。  
冴子は宗太のためにと思い、仕事がない日にも面倒を見てやっていた。休日に、彼が朝寝坊をしている間、部屋の整頓をしたり、出し忘れの洗濯物を持っていったりしていた。休日にはいつも寝ている宗太。だけど、あの日は宗太は朝からエッチなビデオを見て、オナニーをしていた。世話をしに部屋に這入って来た冴子は、宗太に対して弟のように接してきた冴子だったが、予想外の行動に戸惑いを隠せなかった。  
あれから二人の関係はぎこちなくなり、宗太は冴子に見られるたびに恥ずかしい気分になる。

いつもなら、冴子と遊んでいる頃、宗太はベッドの上でぼんやりとしていた。恋する冴子への思いは、変わらなかったが、性欲処理の姿を見られたことによって、ずっと距離が遠くなった気がしていた。どんな、言い訳をしようか。

宗太が煩悶していると、ドアをノックする音が部屋に響いた。

「宗太君？ ちょっといい？」

いつもなら、ノックをせずにフレンドリーに部屋に入ってくる冴子は、今日はずっと控えめだ。宗太は、また距離が遠くなった気がした。

「…ああ…冴子さん、こんにちは」

「…この間は、ごめんね、ノックしないでいきなりドア開けちゃって。まさか、一人エッチしてるとは思わなかったから」

「いや…冴子さんはいつも面倒見てくれてるし、悪くないよ、部屋に無断で入るのを許してくれたのは僕だし…。あんな姿見ちゃって困っちゃてるでしょう？」

「うーん…でもみんなするでしょ？ ごめんね、大事な時間邪魔しちゃって」

「いや…大事って何か…」

宗太は、言葉につまり恥ずかしがる。

「大丈夫、恥ずかしがらないで。私だって、若い頃はオナニーいっぱいしてきたんだから」

宗太は冴子の優しさに、羞恥心がやわらか。だけど、恋をしている相手に性欲を満たすためにベニスいじりしている姿は見られなくなかった。

「ちょっと、私の部屋まで来ない？」

束の間の沈黙のあと、宗太は冴子の誘いに応じることにした。



同じ家にありながら、宗太は冴子の部屋には一度も入ったことがなかった。二人で遊ぶときは大体が宗太の部屋だったし、メイドが住んでいる一角には出入りを禁止された。初めて足を踏み入れた場所に、宗太は緊張していた。

「入って」

部屋に入ると、冴子はピンクローターを取り出して見せる。

「どう、気持ちいいでしょ？」

冴子はオナニーグッズを宗太の乳首にあてる。試すような表情に宗太は恥ずかしくなる

「女の子のHな姿に興味あるんでしょ？私の、見せてあげよっか？」

冴子はパンティを脱くと、股間にローターをあて、悦楽の表情をする。挑発する冴子の表情に、宗太は動揺する。彼女の手が股間に触れていた。

「宗太くん、おちんちん欲しいな」

すぐ目の前で、色っぽい目つきをした冴子の意外な言葉に、宗太はアダルトビデオの中に入ったような気になる。心臓の鼓動が早まる中、冴子に唇で触れられ、宗太は力が抜けていくようだった。

冴子は宗太のあそこが膨らんでも、愛撫していた。

「したいの？セックス？まだ、駄目よ」

ベッドで仰向けになった冴子は、開脚をして挑発的な視線で性器を愛撫する。誘惑を始めた冴子のおまんこに指がぬるりと入っていく。宗太の知らない冴子の部分が、広がり見える。

「見せて、宗太君のもの。もう恥ずかしくないでしょ」

また、宗太は恥ずかしがっていた。

冴子が宗太のパンツを脱がすと、ペニスの先から透明な糸が引き、宗太は恥ずかしくなったが、直ぐに彼女の口の中で唾液まみれになり、快楽にかわる。恋もオナニーも超え肉体の接触が始まった。

「裸にならないと、エッチな事できないよ。セックスしたいでしょ？」

冴子の問いに、宗太は静かにうなずいた。今日は冴子のすべてを受け入れるつもりだった。冴子は宗太に口づけをすると、宗太を優しく包み込み始めた。

















山村家で働く石島藤代は、幹夫の部屋の掃除をしながら、ベッドの下の本をどうすべきか思案していた。幹夫の両親から、Hな本の類は、見付け次第処分するように言いつけられていたものの、幹夫はHがしたくてたまらない年頃。彼の気持ちを尊重するなら、出来るだけ勝手に処分はしたくなかった。

藤代は、とりあえず幹夫の許可をもらうために、処分を先延ばしにする事にきめた。本を綺麗に重ねて、奥の方へ押しやると、幹夫宛てにメッセージを残し、別の仕事に向かった。

「お話があるから、あとで来てくれる？藤代」

熟から帰宅した幹夫は、藤代のメッセージを見ると、すぐに藤代との待ち合わせ場所へ向かった。

「話ってなんですか？」

「あの、ベッドの下のHな本処分していい？ご両親からのいつけて、Hなものの類は処分するようにいわれているんだけど。部屋に来てチェックするみたいだし…仕事ちゃんとかさないと叱られるの」

「そんな…困ったな…僕だって男ですし…女の子の裸に興味あるんですよ…」

「だよな。若いと性欲強いし、精子たまっちゃったらHしたくて仕方がないよね？オナニーして気持ちよくなりたいよね？」

予想外の藤代の露骨な言い回しに幹夫は赤面した。普段、仕事をしている藤代のイメージと随分違う。幹夫にとって藤代は頼れる真面目なお姉さんで、淫らな女性の匂いは全くしていなかった。

幹夫は藤代の体のみる。幹夫は藤代を性的に意識したのは初めてだった。

「…見たい？」

見透かしたように、スカートをちらりとめくる。

「藤代さん…そんな…」

パンツがちらりと見え、幹夫は視線をそらす。

「興味があるでしょ？エッチの面倒も見てあげようか。ただし、エッチは本は処分すること」

幹夫は、今までメイドの仕事以外にも色々面倒をみてもらっていたが、こっこの面倒はなかった。



藤代はゆっくりとパンツをずり下げ、パンツをまくり上げる。  
「ほら、おまんこみってみる？」  
Hな本を持っているだけで、厳しい態度をとる父親の事、こんな現場はとも見せられない。だけど、幹夫は、しゃがんで藤代の股間をみる。  
「触ってもいいですか…」  
「ちゃんと約束守ってね？」  
「はい…」  
幹夫が指で性器に触っていると、藤代は指を誘導して、腔の中へ入れる。  
「なんか…すごく…あったかい」  
「この中を擦っていると、気持ちよくなっちゃうの」  
藤代は、性行為は好きだった。幹夫にはセックス好きの兄がいて、するチャンスはあったが、他のメイドと違って、藤代はしなかった。性格の強い幹夫の兄は藤代のタイプじゃないし、忠実にいう事を聞く幹夫の方が好きだった。

幹夫は言う通りに舌を絡みあわせている間、藤代に身体を任せていた。もう、H本はいない。藤代が優しく面倒を見てくれる。  
いつも頼りにしている彼女の指先は、幹夫のペニスを優しく包み愛撫していた。しばらくすると、二人の性器は濡れ、密着を欲望していた。  
「そのまま、いれて」  
立ったままの姿勢で、藤代はペニスを掴み、腔の入り口に押し当てる。幹夫の身体の圧力で、狭い穴へと入っていった。  
二人の擦りあいが始まると藤代は、快楽の声を漏らし始めた。  
「あっ…んっ…」  
聞きなれない藤代の甘い声が、幹夫の耳元に響く。  
「もう少し勢いをつけて、はげしくやって」  
幹夫はいい所を見せようと、激しく動き始める。動きが強くなるにつれて、藤代のよがり声も、エキサイトしてくる。  
淫靡な匂いが漂う中、頭張ってはいるが、ごちなく腰を振る幹夫を、藤代はいつものように優しく受け止めていた。









「お帰りなさいませ、利治さん」  
塾から利治が家に帰ると、新人メイドが敬語で、出迎えをする。彼女たちの服装に利治は目のやり場に困る。彼女たちの服の隙間から、乳首が見えていた。  
離婚したあと母親は、仕事の都合で、息子を一人にさせてしまうことが多かった。収入の多い母はいつも夜を独りで過ごす息子のためにと、メイドを二人付けてくれた。  
ただ、利治はその二人はいったい何のために雇ったのかわからなかった。彼女たちは、家事はほとんどせず、いつも夜になると淫ら恰好で利治のために添い寝をしていた。  
「お勉強ははかどりましたか？」  
「洋服を御着替えになりましたかね」  
出迎えてくれたメイドの尋子と来夢が、利治の服を脱がし始める。利治は二人の女に囲まれ心地よさを感じていたが、それ以上に困惑していた。  
「ああ…風呂じゃなくて、飯の準備とかしてくれないかな？」  
「どうして？お母様に言われているんです。そろそろこれをしてあげてと」  
「こっちのお世話をするように言われているんですよ」  
来夢は、利治の乳首に触れ、優しく愛撫する。尋子がペニスを口に含むと、利治は力が抜けていくようだった。二人は性的お仕事を開始していた。  
「あ…ちよっ…そんな、洗ってないよ」  
尋子のフェラチオに嬉しくなっていたが、利治は、洗っていないあそこが恥ずかしかった。  
「大丈夫綺麗にしてあげます。毎日、精子抜かないとお勉強に集中できないでしょ？」  
「してほしくないんですか？ほらもっとリラックスさせて」  
「…ああ」  
利治が二人を受け入れる。彼女たちは、全身を愛撫し始めた。  
「どうですか？してほしい事あったら言ってくださいね。このために居るんですから」  
「家事とかは無理ですよ、エッチな事だけ」  
利治は愛撫されながら、母に感謝する。性のメイドだなんてきつとお金もかかるだろう。乳首の上をなでなでする来夢の指と、ペニスへの尋子の口内愛撫で、利治は、塾でならった事を全部忘れてしまっそうだった。  
「一日に何回ヌキヌキして欲しいですか？」  
利治は慣れない質問に恥ずかしくなり、答えることが出来ない。  
「気持ちいいですか？もうちょっと強い方がいいかな？」  
利治はまだ緊張していた。真面目に塾で勉強してきたあとに、こんな破廉恥なことをしているのだろうか。尋子が綺麗にすると言っていたペニスは唾液で汚れ始めた。ペニスにまわりつく尋子の口は窮屈になり、快感で利治は何も考えられなくなった。  
元木家の廊下にフェラチオと愛撫する音が響く。  
「続きはベッドでセックスしましょうか？」  
耳を舐めながら来夢が囁く。  
「…でも、もういきそう」  
「いってもいいんですよ」  
加速する尋子のフェラチオで、利治は口内射精をした。尋子はすべてを吸い上げると喉を白濁液を通し、飲み込んだ。  
「まだ、勃起していますね。おまんこセックスもするでしょ？ベッドにいてセックスしましょうね」  
「たっぷりお世話してあげます」  
利治は二人のメイドに服を脱がされると、彼女たちと手をつなぎ自分の部屋のベッドへと向かった。















外見に似合わずシャイなメイドの永澤桜子は、早村準助の部屋の前で呼吸を整える。彼の部屋に入るのは心の準備がいる。

早村家の長男の準助の女性関係が乱れているのは、家中に知れ渡っていた。部屋には愛人の荷物がいくつも置かれており、大量のコンドームがストックされている。掃除の時間にメイドが部屋に入ると、たいてい愛人と性交をしている。彼と寝た事のあるメイドもいたが、桜子にとって、開放的な準助への接し方がわからず、部屋で仕事をするのは気重かった。彼の部屋は淫らな匂いで充満し、その匂いでほんやりと思考が奪われるようだった。「桜子ちゃん、お仕事的时间でしょ？いいよ、入って」

部屋の前で、入るタイミングを待っていた桜子の入室を準助は許可する。室内では、裸の女がベッドで休んでいた。

桜子が、淫行が行われたベッドのシーツを変えていると、女を見送りに行っていた準助が部屋に戻って来た。

「毎日…いっぱいして体力があるんですね。一日にどのくらいするんですか？」

桜子はゴミ箱のコンドームに目をやりつぶやく。また、昨日のゴミが残っているのか、大量のゴムがあった。

「毎日6回くらいは、鍛えますから。桜子さんはどうなんですか？」

桜子は話をふられて恥ずかしそうにする。話題を間違えてしまったようだ。

「応えてくださいよ。自分から話をふったのにそんな恥ずかしそうな顔しないでくださいよ。意外だなあ。遊んでそんな外見なのにそんな恥ずかしそうにするなんて」

「そんなことないですよ。全然遊んでないです」

桜子は仕事に集中して、話を逸らす事を考える。どうせ、普段から、ろくに話はしないのだ。別に世間話はいらない。

「よかったですら、今夜、エッチなこととして遊びませんか？」

桜子は自分が整理しているものが、コンドームの箱だと気づくまでに時間がかかった。さっきからエッチなものばかり触っている。まるで、性欲が溜まっていることをそれとなく教えてみたいだ。



性欲が溜まっていた桜子は、準助に誘われ、少し嬉しかった。何度か、彼の性交現場に遭遇した事があったが、彼女が経験してきたセックスよりも魅力的な物だったし、興味があった。

「いらっしゃい」  
準助は、緊張している桜子を部屋にいとると、すぐに愛撫を始めた。その間、ずっと吐き続けられる褒め言葉に、桜子はうっとりとしていた。お世辞だとしても気持ちがいい、桜子が謙遜していると、さらに褒め、準助はキスをして、抱きかかえベッドに連れて行った。

メイドとしてこの家にいるのに、お坊ちゃん部屋の部屋で性行為をしているのだろうか。

「仕事とはいえ、いつも掃除をしてきて感謝してますよ」

桜子は、唇から準助の舌の侵入を許すと、ねっとり絡み始める。男の手は、あっとい

う間に、女の敏感な部分まで愛撫し始めた。

いつかの愛人のように、桜子は自ら、股を恥ずかしげも無く開けない。だけど、もう、股間は女の蜜でぬるぬるになっていた。

「恥ずかしい…」

準助が肌を露出させようとする、桜子は、恥ずかしがり、隠す。

「だめ…隠しちゃ」「でも…恥ずかしいんですもん」

「そこ触らないと、気持ちよく慣れないですよ」

胸を隠す桜子の腕を優しく除けると、淡いピンクは興奮していた。今まで桜子は灯りを

弱め薄暗い部屋でしかしたことがなかった。明るい部屋で見られることに、羞恥心を感じながらも興奮していた。

「あっ…」

乳首を口に含まれ、桜子は自然に愉楽の音がでた。

「もう濡れちゃってるね、ここ」

準助が愛撫する股間を指でおすと、桜子は手で隠す。入り口を触るだけで、指に蜜がまとわりつくだろう。もしかしたら、パンツのしみになってるかもしれない。

「いれるよ？欲しいでしょ」

淫らに濡れたおまんこを指で弄ぶ準助に、桜子は自分の淫らな姿を思い浮かべはじめる。

恥ずかしさは、全身への愛撫で開放感に変わり、足を大開脚して、おまんこをびろんと開いておねだりをして、発情した女のように振る舞いたくなっていた。

桜子が頷くと、準助はすぐに挿入した。

「あっ…んっ…あっ…」

挿入直後の激しい動きに桜子はよがり声をだす。

「気持ちいい…おまんこ気持ちいいです」

桜子は準助を掴み淫らな女の目でさらなる快楽を貰えるように懇願する。

「これはどう？」

準助の腰使いが変わる。

「…はぁん…すこくいいです」

桜子は準助に抱きつく、口づけをした。舌の激しい絡み合いが始まる。

「しっかり掴まってて」

準助は立ち上がり、彼女を抱え下から抜き入れを始めた。

桜子は準助がくれる快感を感じているうちに、恥ずかしさが少しずつ消え始めていた。





















夜が深まると、赤井忠勝の部屋では、いつものようにメイドの喜多村芹菜がペニスにしゃぶりついてた。芹菜は愛を与えてあげると言い寄ってくるもの、布団をかぶりながらペニスにしゃぶりつく姿は淫らで、愛というよりは性欲満たすために貪っているようだった。

入眠前の芹菜のフェラに、忠勝はもどかしい気持ちになる。彼女はここまでしてくれてもセックスはいつもお預けにしていた。

勉強に集中しなければいけない忠勝に、Hな遊びは禁物だった。ゴミまでチェックする両親の元、Hをした証拠が見つければ、叱られるのはわかりきった事だった。

「もう行くね」

「…また、兄貴とするの？」

「うん」

「俺とは…まだ、駄目？」

「うーん、この間、手をつないでただけでお父様に怒られたし、エッチしてたのばれたら怒られちゃう。忠幸君はもう社会人だからいいけど、セックスに夢中になってお勉強おろそかになったら困るでしょ？」

自分よりも、芹菜のほうがセックスに夢中になって、勉強の時間もしたがるかもしれない。もう行くと言いながら、ペニスに触り続ける芹菜を見て、忠勝はそう思った。兄が大学を二浪したのは、芹菜との性行為に耽り、勉強をおろそかにしていたからだった。

「心配しなくても、もうしばらくしたらおまんこさせてあげる。毎日させてあげるよ」

芹菜はキスをすると、部屋を出て行った。忠勝の目には彼女の卑猥な笑みが残っていた。彼女は心の底からおまんこ遊びが好きなのだろう。



「お父様は10時ごろ眠るから、そうしたらおまんこしにおいて」  
次の日の夜、忠勝が勉強をしていると、芹菜から写真つきのメールがとどいた。男性と結合している写真で、淫らな笑顔を作っている。予想よりもずっと早い誘いに、忠勝は期待で勉強に集中力が途切れた。  
忠勝は、時間が来ると、寝静まった者を起さないように静かに歩き兄の部屋へ向かった。  
「おう、入れ」  
芹菜とのセックスに夢中になっていた兄は、忠勝が部屋にはいるとすぐに部屋の鍵を開けた。芹菜が大開脚して、忠勝に手を振る。兄はベッドに戻ると、芹菜とセックスを再開した。  
「もうちょっと待っててね」  
ベッドがきしみ、芹菜はよがり声を出す。生々しく結合部が見える。二人の性行為に忠勝は緊張していた。

「次は忠勝君の番ね、おいで」  
兄とのセックスが終わっても、芹菜の性欲はおさまらなかった。恥ずかしげもなく開脚して、濡れた性器を見せ誘惑する。  
忠勝がベッドに乗ると、芹菜は服を脱がし始める。半分も脱がすと、途中辞めにして、おちんちんをしゃぶり始める。  
「おっきくなってきてるね、はやくビンビンにしちゃって」  
芹菜は、お昼のメイドの仕事をしているときも、エッチな感じのする女だったが、それよりもずっとスケベで、欲情している姿は隠すことが出来なかった。  
彼女の口の中で、さらにペニスが膨張すると、すぐにおまんこに押し当てる。  
「前戯は…いいの？」  
芹菜は、性器を舐めあい前戯をするのが好きだったが、今日はさっきまでおまんこに出し入れをしていたところ、前戯は必要なかった。  
「さっき、忠幸君とおまんこしてたから、濡れ濡れだし簡単に入るよ」  
濡れた秘部に男性器がずぶりと入り、二人の交配が始まった。  
「あっ…あっ…あっ…」  
勉強中に、主導権を取る方法を考えていたものの、あっさりと彼女が主導権を握ってしまった。  
芹菜の大きなよがり声に忠幸は動揺する。  
「そんな、大きな声で気持ちよさそうな声出していたら、みんな起きちゃうかも…」  
「大丈夫だよ。臆病なお前」兄が言う。  
「忠勝君は真面目なんだよね。気持ちいいんだもん、忠幸くんもエッチな声出してみたら」  
毎日、性器を舐めあっているのは、真面目とは言えない。芹菜が肩に手を置き、膝の上に乗りピストンを始めると豊富なおっぱいが揺れる。  
「ねえ、忠勝君も動かしてよ」  
忠勝が、きこなく腰を動かすと、相変わらず芹菜は軽快に動く。まるで、躍っているようだった。  
忠勝は、なんだかよく解らなくなっていた。あれだけ、じらされたのに、あっさりと挿入し、貪りつくように身体を求められていた。やっぱり、彼女はセックスが大好きなのだろ。兄の煙草の煙の匂いがする部屋の中、忠勝は全く主導権が取れずに、芹菜の好きなように体を任せていた。















幼馴染が暮している戸村家で、メイドを始めた新村杏里は、暇を持って余していた。夕方から夜中まで働くことになったが、夕食の皿洗いが終わり、お風呂の掃除が終わると、大してしてすることが無く、暇な時間がたっぷりあった。残りの仕事は、戸村栄喜が夜更かししすぎないように注意する事。  
幼なじみの栄喜には、今日からメイドとして接しないといけない。だけど、頻りに遊びに来たお隣さんの家、杏里は仕事をしている感じがもてず、遊びに来ているような感じにしかできなかった。  
夜12時をすぎると、杏里は暇つぶしの読書をやめ、栄喜の部屋に向かった。数年前から夜更かしが習慣になっていた栄喜は、毎日のように夜中まで遊んで、勉強がおろそかになり、大学受験に失敗した。  
浪人生である栄喜を今年こそは、勉強に集中させ入学させないといけなかった。

「栄喜君」  
杏里は静けさが漂う夜の戸村家に、音があまり響かないように控えめにノックをすると、返事を待たずにドアを開けた。  
「えっ…杏里ちゃん？」  
「今日から夜勤のメイドはじめたの。お邪魔するね」  
「そうなんだ？知らなかった。あ…皿洗いしてたの杏里ちゃんだったんだ？」  
「うん。夏休みの間だけ、お手伝いすることになったの。夜更かししてないでそろそろ眠ったらどう？勉強がおろそかにならないように見張っているように言われているんだ」とパソコンで遊んでいる栄喜の肩に手を置いて杏里は優しく促す。  
「まあ、もうちょっとだけ…」  
「ん～でも、夜更かししないように栄喜君を寝かすのも仕事なんだけどなあ。受験勉強はどう？今年はいけそう？」  
「どうだろう。…じゃあ遊ぶのやめて今から、勉強するよ。それならいいでしょ」

「そこは違うよ」  
勉強をする栄喜の横で短大に通う杏里は、優しく間違いを指摘する。  
「…なんかその服エッチだなあ。集中できないよ」  
「いつもと違う服装の杏里に、栄喜は喜びつつ、困惑もしていた。  
「どこ見てるんですか？ご主人様、こちらのお勉強に興味は終わりですか？」  
杏里はフィクションのメイドぶった口調でスカートをぎりぎりまでめくり、茶化す。  
「やめてよ。そんな口調」  
杏里のメイドぶりに栄喜は真面目に対応しつつも、その続きが気になっていた。  
「ご主人様を寝かしつけるのもお仕事ですから、こっちのお勉強は明日にしてはどうですか？これをして、ぐっすりお休みになりませんか？」  
杏里が、耳元で囁き、股間を優しく愛撫する。幼馴染とはいえ、体験したことのない杏里の愛撫に、栄喜は言葉が詰まった。

ベッドの上で、栄喜は女の身体を学び始めた。数年前、憧れていた杏里は別の男になり、栄喜はあきらめた。だけど、彼女は男と別れ、今、目の前で身体を許していた。  
指が何の障も無く杏里の産の奥へと入っていく。濡れた花びらに栄喜の指は誘導されていた。指の動かし方を教わると、栄喜は教わった通りに動かす。恋い焦がれた杏里の快楽の表情に、栄喜はずっと触れ合っていたくなくなった。  
「もう入れる？」  
栄喜が頷くと、杏里の中へ入っていた。二人を乗せたベッドがきしみ始めた。勉強とはいえぬような性行為。だけど、二人はその行為に満足していた。  
「あっあっ…栄喜君、気持ちいい」  
シーツを掴む杏里のお尻が前後し始める。  
夜の闇が漂うなか、戸村家では栄喜の部屋の灯りだけかともり、そこでは眠りにつくまでの間、男女の求め合いが続いていた。













ピンク映画の監督をしている郷田博之は、編集の手を休め、タバコの箱を掴む。捺美に頼もうか、空箱をゴミ箱に捨てると、郷田は仕事を中断して部屋を出た。和多田捺美は、寛之の家でメイドを始める前、脇役でいくつかの映画に出演した。主役が決まりそうだったが、親にばれ、叱られ、彼女はピンク映画界から去った。元来、性欲が強くセックスが好きで彼女にとって、普段の生活は退屈なものだった。そんなある日、寛之と捺美は再開した。寛之が雇っていたお手伝いさんがやめ、次の人を探していた所に、捺美は志願してきた。彼女は住み込みを希望し、仕事が決まると、熱心に働いた。

「お出かけですか？」  
捺美は寛之を見かけると、廊下掃除の手をとめ、声をかけた。  
「いや、ちょっとね、煙草がきれたもので…」  
寛之は煙草のお使いを頼もうと思っていたが、捺美のめくれたスカートが気に入り足を止める。少し短くなっていないか。  
「ああ、隠さないの？見えてるよ？」  
「いいですよ、みても、どうせ、撮影の時に見られちゃったし」  
かなりの好きものだという噂は聞いていた。何人ものスタッフとセックスをしたし、経験人数も軽く100人を超えるとか。寛之は、捺美の外見と中身にギャップを感じていた。  
寛之が見ていると、捺美は女のラインを強調して、掃除をする。  
「一階に買い置きがありますよ。煙草とってきませんか？」  
「いや、いい。自分で行く。掃除続けて」



寛之が煙草をとってくると、捺美はまだ廊下掃除をしていた。寛之は、仕事中は出来る限り、他所への性欲は抑えるようにしていた。だが、今日は妙に色っぽく感じる。  
「もう、ピンク映画には出ないのかい？」  
「両親に怒られますから」  
「そんな、いやらしくパンツ見せてたら、両親が怒らないかい？」  
「だって、捺美はスケベな女ですもん。見せても興奮するんですよ。一つの家で毎晩二人きりでいたら、パンパンしたくなりませんか？」  
捺美はいやらしい目で寛之を見る。  
「捺美のエッチなおまんこでお遊びしません？」  
寛之はパンツの上から割れ目に触れる。  
「あっ…」  
捺美はうっとりとした顔をする。  
「いけません…こんなこと…ご主人様」  
「なんだ、誘惑してたくせに…ちょっと濡れてるじゃないか」  
「はい監督さん…エッチな捺美とお遊びしてください。」  
捺美は下着の隙間から、寛之の指をおまんこの中へと誘導した。

割れ目の穴に指を入れると、ねっとりとした粘液が絡みつく。中の具合は、寛之の知っている女とは違っていた。指が入った途端に男なれしたおまんこがからみついてくる。寛之は捺美の股間に顔を近づけ、深く息を吸う。  
「あっ…匂い嗅いじゃ駄目です…恥ずかしいそんなとこ」  
寛之が捺美の股間の匂いを嗅くと、捺美は本気で恥ずかしがっていた。  
「ずいぶんといやらしい匂いがしているじゃないか」  
「あん、だめ…恥ずかしい」  
「恥じらいがないように見えたが？」  
寛之は、また匂いを嗅ぐ。寛之は初めて素の捺美を見た気がした。  
捺美は心から恥ずかしがっていた。寛之が捺美の入り口に指を入れると捺美がよがる。  
「あん…もうだめ…おちんちん入れてください」  
「もう欲しいのか？」  
「はい、スケベな女の子は早くハマハメしたいんですよ。最近してなくて、性欲溜まってますよ。」  
捺美はうっとりとした目で、おまんこを拡げる。  
「はやく…入れてください」  
寛之は望み通り、捺美のおまんこに挿入する。匂いを嗅いだ時の恥ずかしがる捺美はおらず、発情した娘に変わった。  
「あっ…あっ…奥までついでください」  
捺美の息遣いがどんどん粗くなる。  
「監督さん、明日はプライベートの、捺美のエッチな姿撮ってくださいよ。」  
「本当にスケベな女だなお前」  
捺美は自分から動きながら、おまんこを寛之の性器に擦りつけていた。









いつも真面目に、隔々まできちんと仕事をこなすメイドの江村帆奈には、その仕事ぶりからは想像できない一面があった。  
誰にも甘えることなく仕事をこなした夜、彼女は雇い主の広井義一の前では淫らな女になくなり、甘えるのであった。

帆奈は、いつものようにお昼の仕事をきちんと終わると、スカートを少し短いメイド服に着換え、義一にメールを送る。服の交代は彼女の性遊戯への入り口だった。  
帆奈は約束を取り付けると義一の寝室へ向かう。帰ってくる前に掃除をしておこう。長い廊下を歩き部屋へ向かっていると、主任がまだ仕事をしている。義一は服装の乱れを注意することはないが、メイド主任は厳しくメイドたちの服装を取り締まり、乱れていれば説教を始めるのだった。帆奈は主任と鉢合わせしないように、足早に向かった。

「やあ、ただいま」  
義一が家に帰ってくると、帆奈は義一に抱きついてキスをする。ほんの数秒のキスで、帆奈はうっとりとした目になる。  
帆奈は、自分で着換えはじめる義一を制止し、服を脱がせ始める。いつもの二人のやりとりだった。  
帆奈は、仕事帰りでも甘えさせてくれる義一が好きだった。優しいし、包容力がある。「帆奈、してほしいんだろ？」  
帆奈が義一の身体を愛撫すると、義一は帆奈の髪をなでる。

「はい」  
義一は、帆奈を連れてベッドまで行くと、身体を愛撫し始めた。帆奈は身体を触られるが好きだった。いつまでも触れられていたい。  
帆奈は、愛撫して、いつも情欲を満たしてくれる義一に、優しいキスで返す。ねっとり舌は絡まり、股間からじわりと興奮し始めた。

パンツを脱我された帆奈は、性器をみられると、いつものように恥ずかしがる。どれだけセックスをしても、おまんこを見られるのは恥ずかしかった。だけど、義一にとって、そんな帆奈の姿は可愛らしかった。  
クリトリスに舌が触れると、彼女は甘い声を漏らす。  
「あっ…膣の中にも舌を入れて、舐めまわしてください」  
びちゃびちゃと音を立てて舐めまわし、膣の中に舌をいれると、帆奈はうっとりとして、男性器をここにいれて擦りあいたくなる。  
お昼に、熱心に仕事をする帆奈の姿は無く、性感帯を刺激され感じている女がそこにいた。

「欲しいのか？」  
「はい」  
帆奈は義一のペニスを優しく撫で、愛撫で濡れた性器への挿入を、甘えた目で懇願する。「おまんこに入れてください」  
帆奈の中にペニスがゆっくりと入っていく。発情したおまんこはすぐに、ペニスに絡みついて、甘え始めた。  
「お前は、激しいのが好きだったな」  
帆奈の後ろから胸を揉みながら、義一はさっきよりもベッドを軋ませる。  
「はっん…あっ…はぁん…」  
帆奈の膣からあふれる愛液は、義一の性器の根元まで流れ出ている。  
「抜かないで、入れたままで…」  
体位を変えようとする義一にしがみつき、ペニスが抜けてしまうのを阻止する。ゆっくりと体位をかえると、帆奈はしっかりと抱きついて、またおねだりした。  
「いつまでも、こうしてたいです」  
「思う存分抱いてあげるよ」  
義一がそういうと、帆奈は長い口づけをして、甘え続けた。